人間とゲンゴロウの生きる水

生駒市立上中学校

明田　七海

「いた！」

弟の声は、辺りに響いた。そこは伯耆富士といわれる鳥取県の大山のふもと、青い青い空の下にどこまでも続く田んぼだった。絵葉書になりそうな美しい場所で、心が清くなり、大きな自然に生かされている気持ちになった。暑い夏だったが、田んぼの水は透明で美しくひやっとした。種類は正しいかわからないが、弟はヒメゲンゴロウだと言った。小さいサイズだったが、私も両親もスマホで調べてゲンゴロウには間違えないと思った。

弟は、ペットショップで並んでいるものではなく、自然の水の中にいるゲンゴロウを見たいと、家族で半年くらいずっと探してきた。私有地に無断で入るわけにもいかず、難しいミッションだった。私の住んでいる奈良県は、地元生駒市から大和郡山市、御所市、十津川村に至るまで山の中のコンクリートに囲われていない池や、昔ながらの風景の中にある田んぼを目を皿のようにして探した。しかし見つからなかったのだ。祖父は、

「子どもの頃は遊んでいた京都の鴨川やその辺の田んぼにたくさんいたのになぁ。」

と言っていた。

では、なぜ、ゲンゴロウは姿を消してしまったのだろうか。探してみて分かったのだが、ほとんどの沼や池は周りがコンクリートでかためられている。これではゲンゴロウの生きる水とはならない。姫路水族館の市川憲平さんが論文の中で、

『水田とその周囲の生態系を変貌させた原因は、伝統的な農法から近代農法への変化、水田などの整備に伴う生息環境の変化、生産調

整による水稲作面積の減少と耕作放棄地の増加があげられる』と述べておられる。簡単に言うと、人間が楽になるために、人間が得するように、またその時の人間の事情で自然を操作してきた結果、ゲンゴロウの住む水をうばってしまったのである。すべて人間が悪いと私は言えない。今の時代に田植機をやめて、また水苗代に戻して手植えにすることはできない。沼や池をコンクリートとフェンスで囲って危険や災害から守るのもわかる。私は本当に悩んでしまう。人間の事情とゲンゴロウ等水生昆虫の水を選ぶことができないのだ。

人間を生かしてくれる水は、小さな生き物も生かしてくれる。私は今、両者を幸せにする水の有様がわからない。正直わからないけれど、私なりに考えてみた。生き物の生きる水のことを私たちが知ることは必要だと考える。今、日本の色々な場所で作られているのが、ビオトープである。ビオトープとは、公園や河川で動植物がうまく生き続けられるように考えて整えられた場所、生物群集の生息空間である。大山を訪れた時、隣県島根県の宍道湖自然館ゴビウスにも足を運んだ。ゴビウスの庭にもトンボやカエルが住みやすいような工夫があったが、ゴビウスの施設の横には、宍道湖ビオトープ池、宍道湖グリーンパークがあった。グリーンパーク内の一部は人の立ち入りを制限して動植物の生息を優先している。こういったビオトープが今、全国各地にできている。人間の手によって、小さな生き物が住みやすい水をつくり、生態を学んでいくのである。人間自ら壊した自然を、また再生していくのはおかしい気もするが、今の最善の共存方法なのかもしれない。

人間が安全安心、快適に暮らすための水の有り方は、ゲンゴロウには適さない。人間の生活圏に共存することは厳しいが、ビオトープ等の水に生き、住み分けの時代をつくっていくのがよいのではないか。

それにしても、大山のふもとの田んぼの水はピカ一に美しかった。心の中にキラキラと輝く水の風景をいつまでもとどめておきたい。